

第2回丹後地域における府立高校の在り方懇話会（概要）

- 1 日 時 平成28年3月8日（火）午後1時30分～午後4時00分
- 2 場 所 みやづ歴史の館 文化ホール
- 3 出席者 25名
府教育委員会 川村指導部長、山埜高校教育課長、中島担当課長
山本丹後教育局長、堀田丹後教育局次長 ほか
- 4 概 要
(1) あいさつ
(2) 説明・報告等
(3) 意見交換（主な意見）

■説明・報告等

- ◇ 第1回懇話会における主な意見を紹介
- ◇ 本日の意見交換時の観点について説明及び関係資料の説明
 - ・地域創生（産業振興などの重点戦略）と高校の設置学科の関係
 - ・地域の生徒が魅力を感じる、必要としている教育内容、部活動、就学・通学支援など
 - ・他地域から呼び込む手立て（教育内容、部活動、就学・通学支援など）

■意見交換（主な意見） ○：出席者 ◆：府教委 ◇：進行

- 1回目の討議を踏まえ、教育内容を中心に話をしたい。

高校については、私学1校、海洋高校、宮津高校、峰山高校。以上の設置を望む。具体的に言うと、生徒数が減少していく中でも、丹後地域における高校の存在は知り知れないものがあるので、なくしては困る。通学時間を1時間程度とすると、久美浜から由良までカバーできるのではないかと。

通学については、できれば公共機関等により、安全かつ安価で通学できれば良いと思っている。

また、高校の専門課程についてであるが、昭和20年代から水産高校で学んだ人たちが伊根町の漁業を支えてきた。その人たちはすでに70歳、80歳になっている。その後を引き継ぐということで考えると、その当時は無線など様々な資格を習得して現場で活用していた。ところが、現在、海洋高校には通信機器（レーダー、ソナー）等々の資格の研修がない。魚を探すのは目視ではなく、すべて海水の温度、海流の流れ、幅、大きさをみて魚種を決めて網を打つ、ということを見ると、もし漁業がこれからも必要であるなら、海洋高校においてはそういうことも視点にして専門課程を設定してもらえたら良いのではないかと思うところである。操船技術、あるいは通信機器、海洋環境など海に関する幅広い内容を教え、3年間学んだ後に次へステップしていくのが良いと思っている。

宮津・峰山高校については、普通科あるいは実学科が必要ではないかと思う。海、山、里の3つがあり、ちりめんの里でもある。そうしたことを考えると、普通科の中に様々な内容が必要なのではないか。10年後に生きる子どもたちのために、高齢化や福祉等々に対応する、看護科、医療科等々の様々な資格取得ができる教育内容を考えてもらえると嬉しい。また、宮津高校と峰山高校に、分校として清明高校のようなシステム、4年あるいは5年間かけて高校教育を習得していき、そして世の中のために貢献していける人材を輩出することが、特別支援学校と合わせて構築できればと思う。

最後に、この再配置の中で子どもたちに魅力ある高校というのは、よい友に出会え、勉強したな、学んだなという思いができるようなもので、多様な能力の発揮につながるシステムをつくっていただきたいと思う。

◇ 大変具体的な意見をいただいた。今のご意見に関連してでも、その他の視点でも結構なので、この丹後地域で今後どのような魅力を出していくのか、また、そのために必要な教育内容についてご意見があればお願いしたい。

○ 今の高校生と保護者は高校に何を求めているのかについて、調査をしたことはあるのか。

◆ 入試制度を改めて、今年で3回目の実施になるが、一昨年、全日制入学者全員とその保護者を対象に、どのようなことを望んで高校を選択したか、どのような情報が欲しかったか、変更した入試制度についてどのような感想を持っているか、といったことを調査したことがある。その中では、自ら特色を選んで進学できる入試制度に対する高い評価や、学校説明会で様々な情報を得られて良かったというご意見をいただいたところである。

○ 例えば野球で言うと、監督にもよるが和歌山県の日高高校中津分校は甲子園に出場したことによって、野球をしたいという子が県外からも増えたということであった。手っ取り早く子どもたちを外から呼び寄せる要素としては、大学受験が大きなポイントだと思う。京都には府立大学のほか、私立、国公立など多くの大学があるので、宮津高校でも峰山高校、加悦谷高校、網野高校でも良いので、通えるかどうかは別として、どこかの大学の附属高校化して、高校生活の中で一生懸命、勉強や部活動、日常生活において充実した時間が持てた上で、大学にまで行けるということになれば、地元だけでなく、おそらく他府県からも来るだろうと想定されるので、そういうことも考えてもらえればと思う。

また、専門学科で言うと、機械金属業であるとか、また、丹後は観光が盛んな地域であるので、高校3年間のわずかな期間で学んでも、すぐに現場で役に立つとは思わないが、そうした就職につながるような内容も考えてもらえればと思う。

◇ 中学生の進路選択に関して、前回の懇話会でも中学校3年生段階で将来を見越して専門学科等を選択する生徒は少ない、というご意見をいただいたが、そうしたことも踏まえ、高校に対してどのような教育システムを望んでいるか、ご意見をいただけないか。

○ 他府県や他地域からこの地域に生徒を呼び込むという点で、先ほどの大学の附属高校化というご意見にはなるほど、という思いはあるが、現状では大変厳しい。他府県や他地域から来るということは、逆にこちらから出ていくことも考えていかなければならないと思う。現在は高校受験に際して地域から出ていく生徒は大変少ない。今年度の本校卒業生のうち3名は丹後地域を出るが、80名中3名はそれほど高い率ではないと思う。今年の3名は多い方で、先ほど出ていたスポーツ関係である。野球は甲子園に出場することでかなりコマーシャルになっている。残念ながら本府の場合、公立高校がなかなか甲子園に出場していない。特に北部地域の公立高校は甲子園に出場していないということで、なかなか野球で子どもたちを呼ぶということにはつながらないと思う。

これは先に行き過ぎているのかもしれないが、やはり企業、就職先が重要と思う。人を呼ぶということ言えば、大きな企業がこの地域にあれば話は変わってくる。高校生を呼ぶということではなく、人を呼ぶという意味では大事な部分であると思う。

また、前回の意見にあったが、本懇話会は4回程度開催し、2年程度の準備期間

を経た後のことを考えていくということで理解しているが、中学校現場からすると、準備期間の2年間はどうか気になる。先ほどの資料説明の中に、子どもの数の推移があった。案段階であると思うが、今までこの時期に、先の年度の定員が示されることはなかった。中学校現場としては、来年度についてはどうするのかということも考えて欲しいし、知りたい。現状（の学科等）を維持して定員の減で対応するのかということも知りたいというのが本音である。したがって、本懇話会ではこの両面を見てもらわないといけないと思っている。

- ◆ 募集定員については概ね8月末頃に発表しているが、私学ともいろいろと協議をさせていただき、かねてから丹後地域では公立高校が中学3年生の数に対して8割程度の募集定員となるよう設定してきた。全ての子どもたちを受け入れたら良いのではないか、そもそも募集定員をなぜ絞るのか、と疑問に思われる方も多いと思う。かつては、適格者主義のもと高校は入学試験をして、高校教育を受けるに足る能力のある子どもたちのみを受け入れるという姿勢であったし、そういう規定もあるが、現在ではほとんどの子どもが高校教育を受けるので、募集定員100%ということを考えても良いのだと思う。しかしながら、子どもの減少に合わせて募集定員を落としていかないと入学試験が機能しなくなり、あらゆる学力の子が全日制課程に入学してくることになる。その結果、中学生は誰でも入れる高校に魅力を感じなくなる。入学した子も他の子についていけなくて退学につながるなどする。保護者も子どもたちも必ずしも全日制を選択してはいない。定時制課程でゆっくり4年間かけて学ぶ、又は通信制に進学する、あるいは別の進路に進むなど、希望者全員が全日制を目指しているわけではない。そうした中、それぞれの高校の教育機能を確保していく上では子どもの減りに応じて募集定員を絞っていかざるをえないということがある。来年について言えば、中学卒業生数が与謝・丹後で180名程減るので、4学級程度減らしていかなければならないという現実がある。したがって、この時期にこういう話をするのは例年より早いのだが、それくらい厳しくしていかないと高校教育が非常に難しくなるし、必ずしも志願者の希望には沿えないことになっていくと思っている。

- 国公立大学に行ける力をつける必要は絶対にあると思う。どこかの高校にそういう学科を設置してほしい。中学校から高校へ行く場合もそうだが、福知山の中高一貫教育校には丹後からも行っているし、特進コース等のある高校へ進学する生徒もいるので、そういう学科は必要だと思う。また、現在、間人分校が果たしている役割は非常に大きく、不登校傾向の生徒、特別支援学級に在籍していた生徒など、多くの生徒を受け入れて、卒業させてもらっている。丹後に間人分校がなかったらどこに行くのかと現場をあずかる者としては考えている。また、不登校や特別支援学級に在籍しない、いわゆる発達障害のある生徒も非常に増えてきている。この子たちをどのように高校で育てていくのかということも含めて考えてもらえればと思う。

地域創生という点であるが、農業や水産業、企業など様々な魅力が丹後にはたくさんある。実際にそれらに携わっておられる方も多く、若い方も多いが、ではそこで働きたいという中学生や高校生がいるのか。なぜ魅力を感じないのか、ということを考えていく必要があるのではないかと。いくら高校でそうした学科を設置して育てても、地元でそうした人材を受け入れられる素地はあるのか。個人とか企業ということではなく、府や市町村で考えてもらう必要があるのではないかと。私は丹後で生まれ育ったので、丹後の自然の魅力、農業では米で特Aを輩出した実績もあるし、様々な面で非常に魅力のある地域だと感じている。こうしたことに生徒たちも魅力を感じてもらえるようなことができないかと思う。

また、他府県から人を呼び込むという意見もあったが、これは大変難しいのではないかと感じている。

◇ 将来的に丹後に子どもたちが戻ってくるためには、職業ということについても見据えて考える必要があるというご意見もいただいているが、各市町で、将来的に丹後に戻ってきて就労するといったことを見据えた施策など、取り組んでおられることがあればご紹介いただければと思うがどうか。

○ 宮津市では、海洋高校に海の関係の様々なお手伝いをしてもらっている。海の資源を活かして、地域の特産品ができないか、売り上げを伸ばしていくことによって、雇用が生み出せないかということで、ナマコやホンモロコなど、そうした分野でお手伝いをしてもらっている。また、アカモクなどについてもなんとか活かしていけないかとお世話になっている。

宮津高校の建築科には、地域の観光地のベンチなどの整備など観光地づくりに努めてもらっているところである。また、地域のみなさんが求めておられるバスの停留所なども造ってもらっており、大変お世話になっている。これからは普通科の生徒にも、まちづくりの政策提言のようなことを一緒にしてもらえないかと思い、始めていきたいと思っている。

京都暁星高校には、阿蘇海において美しい海を取り戻すための支援をしてもらうなどしており、それぞれ特色のある地域づくりに協力してもらっている。

そうした中で、私どもとしては、やはり地域から素晴らしい人材を輩出していきたいということで、先ほどご提案もあったが、これまでどおり国公立大学を目指せるような機能を持った高校、それぞれ地域にある水産業や農業などを活かしていきけるような高校、地域の文化や財産を守るための技術を継承する高校などは引き続き機能としては置いてもらいたいと思っている。

今回の地方創生の動きの中で、宮津市では、観光を中心として人の流れをつくり、さらに、海や里、山の資源を活かした観光の商品づくりをして、雇用の場を生み出せないかということを考えている。併せて、新しい企業、環境関係などの新しい企業を誘致して、電気や、資源を活用したバイオなどの分野での新しい人づくりができないか、あるいは働く場ができないかと考えている。そうした地方創生の動きの中で、働く場をなんとかつくっていかないと戻ってきてもらえないということで、その点をこの間なんとかしていきたいと思っているところである。

また、先日の府立高校の中期選抜の志願状況を見せてもらったが、地域の中でも志願状況が良い高校と定員に満たない高校がはっきりと出ていると感じた。本当に生徒がどういう高校を求めているのかについては、分析して、意見交換をしていく必要があると思っている。

働く場所は宮津市内だけでは限られたところしかないので、北部の5市2町で全体として受け止める。住むところと働くところをこの広い範囲の中で取り込んでいくという形にしていかないと1市1町では難しいのではないかと考えている。そうした点は、全体として連携しながら取り組んでいく必要があるのではないかと考えている。そういう意味では5市2町で連携して取り組むことも現在進めているので、そうしたことも併せて考えていけたらと思っている。働く場はなんとか用意していく方向で頑張っていきたい。

○ 地方創生という観点からすると、本市でも移住・定住対策に非常に力を入れてきている。また、府でも様々な対策を打ってもらっており、例えば、農業や漁業については後継者を育成するというので、学舎などの対策を打ってもらい、他府県から来られた若い方々などが動き始めている。行政も府を含めてそうした対策を一生懸命打っている最中である。地方創生の方向に向けて様々な対策を打つ、まさにそういうことが始まっていると思う。特に丹後の場合、これも府の力もあるのだが、「海の京都」「お茶の京都」「森の京都」など、様々な京都独自の対策を打ち出し始めてもらっており、例えば「海の京都」は観光。海の京都DMOという新しい組織をつくらうという動きもある中で、地方創生の活動を一段上げていく。行政としてそういう時期にきていると思っている。

付け加えると、食の王国でも人材育成ということで取組を進めてもらっている。したがって、高校再編問題については、数の議論も最終的にはあるのかと思うが、現時点では様々な努力をすべきだと思う。行政でもそうした形で一生懸命やり始めている中で、その地域の高校再編が進められていく。大学のない丹後では高校は地域にとって重要である。例えば、全国募集についても非常に難しいだろうとは思いますがやらない手はない。やらずして難しい、ということではなく、努力をして取り組んでいくべきだと思う。様々な議論がある中ではあるが、最初に申し上げたとおり、結論ありきで進めないでほしい。もっと議論を重ねてほしい。もっと関係者が努力を示すべきだと思う。

- 伊根町のモットーは「ないものねだりをするな」である。あるものに磨きをかけて、これを世に発信していけ、ということが伊根町の方針である。その中で、本町では現在、観光が盛んになってきている。観光も個人の開業等も増えつつある中にある。しかし、一方でいくら観光が栄えても農業や漁業などの町の基幹産業がしっかりと育っていかないと、観光も育っていかないと町長から言われている。町としても、農業や漁業を守っていかねばならないが、後継者が地域に残ってくれない。本町から海洋高校に進学する生徒もいるが、卒業して町に残って漁業をするという流れにはなっていない。

一方で、Iターンで町外からも若い青年たちが入ってきてきている。府内の海洋高校卒業生の方もいれば、大阪や東京の方もいる。また新規の就業者として東京から来られている方もいる。また、農業についても国の様々な施策もあって、新規就農者が町に落ち着いて、町内に家を新築し、農業経営を軌道に乗せている方もある。こういう中ではあるが、町の中学校を卒業し、高校に進学する生徒のほとんどが、卒業後大学などに進学したり、一部就職したりで町を離れると戻ってこず、町としても困っている。本町においても、人・まち・仕事という地方創生の新しいビジョンを立てて取り組んでいるが、あと10年もすると大変な時代がやってくると懸念している。

いかにして後継者を残していくかだが、高校時代にもっと伊根町の生徒に農業や漁業に関心を持ってもらうということも一つの方法と思うが、それだけを望むということもなかなか難しい状況にある。これは本町だけではないと思うが、なぜ高校を卒業して地域に残ってくれる生徒がいないのかということについて、高校や行政、保護者、生徒と一緒に考える場を、この機会とは別に持つのが良いと思っている。高校や大学を卒業しても伊根町に、あるいは丹後地域に帰ってくるようにしっかりと指導していくということも大事ではないかと思う。一旦都会へ出て行くのは良いと思う。都会へ出て行っても最後は地域に帰って、地域の企業に勤める。あるいは家業の仕事を継ぐという仕組みができるように、学校でも指導してもらえたらと思っている。

- 今のご意見にあったように、生徒は一旦は外に出る、と基本的に考えている。小学校、中学校、高校を卒業して地元に残る生徒は、手元にきちんとした数字を持っていないが、丹後通学圏で5%か6%ということを知ったことがある。現在、高校生は1学年1000人前後いると思うが、60名程度が地元に残ることになる。私も何十年か教員をしているが、どうしたら地元に残るかということを考えながら教育にあたったという経験は非常に少なかった。

一方で、先の日曜日、東京で同窓会関東支部の総会に行ったのだが、その時に出会った若者から、東京で数名、京丹後市で数名、というまだ10名前後のグループだが、丹後に若者を帰す活動を始めていると聞いた。そういう青年が育っているという点では、我々は意図的にそうしたことを目指してはいなかったが、丹後の地で大事に育てられながら、丹後の良さを自覚して東京などで活躍し、あるいは丹後の若者と連携しながら、丹後の魅力を発信する活動をしてきている。私もそうした観点で授業をしたり、生徒に接したことは少ないが、改めて本年度、丹後機械工業協

同組合の方と話をしながら、子どもたちが卒業後に丹後に残るために、まず具体的に丹後にある機械金属関係の工場や会社を教えてやってほしいということで、そうした活動が始まったところである。峰山高校の産業工学科機械系統は以前からインターンシップや工場見学等をさせてもらっていたが、そうした部分を普通科にも広げ、94～95%程度の子どもたちは一旦丹後から出て行くが、進路選択をする際には丹後も視野に入れて考えられるというような教育をもう少し意識的にする必要があると思っている。そのためには、一つは、生徒が様々なことを高校で体験することは非常に大切と思う。様々な授業を選択できること。もう一つは部活動において仲間と切磋琢磨しながら様々な部活動を経験できる。「この学校に行くとこの部活動ができない」、「丹後の学校にいるからこういう教育しか提供できない」ということではなく、ある程度の学校の規模を持ちながら様々な教育、あるいは部活動、人間関係を経験できる、そういう学校が是非必要と思っている。

また一方で、先ほど清明高校という名前が挙がっていたが、不登校や発達障害などの生徒には、少しゆっくりとしたスピードで教育をする環境も必要だと思う。そうしたバランスを考えながら検討をしてもらいたい。

- 本校では就職よりも進学する生徒の方が若干多い状況になってきている。先ほども広い範囲から生徒が進学してきていると紹介してもらったが、地元の子供たちは2、3割程度にとどまっている。府南部や他府県から来ている生徒も含めて、地元に残るように府の漁業士会の方や地元の様々な事業所、宮津市、伊根町、与謝野町の各関連の事業所にも協力してもらい、地元の水産業はこんなに面白い、こんなに可能性があるということを見せてもらっている。先ほども紹介があったように、地元に残って、開発したものを地域の特産品として普及させるために頑張りたいと思わせるような事業が入口にさしかかっているのかと思っている。先ほども、現実問題として、海洋高校に行っているが卒業後地元に残らないという指摘をいただいた。必ずしも地元に残る生徒ばかりではないが、逆に外から来ている生徒でもIターンという形で、伊根町で漁業に就いたりしている。トータルで、地元の水産業に就く生徒が増えればと思っている。

関連産業には7割くらいが就職している。その7割のうち、いかに多くの生徒を地元に残すかということが本校の課題だと思っている。海の民学舎の1期生がほぼ終了に差し掛かっており、2期生の募集も順調だと聞いている。海の民学舎に協力し、また、協力もしてもらいながら、トータルで地元の水産業に貢献ができたらと思っている。

- 本校の場合、地元を中心に就職を希望する生徒が本年度の卒業生118名のうち20名余りという状況である。専門学校に進学する生徒も多いが、その中で看護系の学校に進む生徒も10名程度いる。

今年度は、生徒に様々な地域の課題、あるいは地域の良さを理解させる取組を行ってきた。本日の資料にもあるが、例えば、町長にこういう政治をしたらどうか、あるいは、こういう取組をすれば地元若者が残るのではないかとといった提言をする機会を設けたり、高齢化問題を理解するという観点から地域のお年寄りに料理を振る舞うという取組を行った。生徒が地域の様々な問題に目を向けることによって、地域の良さを理解させる。そのことによってこの地域に残ろうという気持ちを強く持ってくれればと考えている。高校入学後に地域の問題や地域の魅力をより理解し、地域に残りたいという生徒を育成する。そういう思いを持って取り組んでいるところである。

- 丹後広域振興局の戦略会議にも出席している。その中でも、常に丹後にどうすれば若者が帰ってきてくれるかという話をしている。一緒に参加をしている「積進(せきしん)」の専務が、「ハローワークなどいろいろな手段を取っているが、丹後の人は一人も来ない。他の地域の人たちがこの地にやって来てくれるので、住む場所

も提供しているが、これはどうなんだろうか。」という話をよくする。地域の保護者の在り方であったり、文化だったり、そういう伝え方は本当にどうなのだろうということをよく議論する。農業の話もかなりしている。

今朝も弥栄中学校に行って食育の話をさせてもらっていた。中学生とご飯を食べながら、「高校は決まったか。」と尋ねたら、「宮津高校に行く。」と言っていた。受検の話をしていると、他の子は、和歌山県の新設校に野球をするために進学すると言っていた。保護者の立場からすれば、魅力ある高校であれば子どもはどこへでも行く。遠くても行く。日本の大学でなくてもアメリカでもどこでも行くというグローバルな考え方になっていると思うが、一般論としては、この丹後地域で通学のことやお金のことを考えて、本当にそこに行くのかという話になる。生徒が減り、来年度には4クラスも減らさなければならぬという話の中で、魅力ある高校って何だろうという話なのだと思う。各論や空論の部分も結構あると思う。目の前の保護者や一般の人たちは、本当に危機感を感じながら、いろいろな場で話をしている。先日もあるバレーボール協会の理事会でもお話をさせていただいた。バレーボールはどうなるのだろうかといった話も含め、あるべき姿を少しずつ示したり、再配置の学科の検討にあたっての視点や、こういう高校もあったらどうか。本当にキャンパスという話ができるのか。私もずっと部活動をしてきたので、学級数が減ると、当然、活動ができない。網野高校には魅力ある部があり、峰山高校でも頑張っている部がある。具体的に中学生を取り合いせずに、しっかり学問と部活動、地域のことも含めて、キャンパス化ができるものかどうなのかという、近々の話について、保護者は感じているのではないかということで、色々なところで話をしているところである。

将来的には、農業分野で専門のしっかりした後継者が育つ農業高校が丹後にひとつあってもいいのではないかと思っている。隣の兵庫県の加西の農業高校は就農率が高く、大学行ってからも帰ってくるという高校になっている。そういう魅力ある高校であれば、どこでも行くと思う。

- 高校現場では、当然のごとく地域創生も視野に入れて教育をしている。今、不足しているものはコーディネーターだと思う。例えば、学校現場でも職業学科単体で学べる時期ではない。社会のプロの手を借りて、学校、地域、みんなで育てる時代が来たと思っている。例えば、本校の商業科も様々なところと連携させてもらっているが、実際にお金を動かしてないので、儲かったのか損をしたのかは、正直なところわかっていない。しかし、そうすることの意義や魅力は十分伝わっていると思う。そこを一步超えて、地域ではこういう人材がいる、こういう所がある、ここに就職もできる、ここで起業もできる、といったヒントをもらい、こういう風にすれば成功するよ、とアドバイスしてもらえれば、どんどん高校生は力を発揮していく。

高校が何もしていないわけではなく、今年もジョブパークと連携して、地域を離れる高校生全員に対して、丹後の求人に関して連携がとれる体制を取った。初めてそういうところまできたので、そこに京都暁星高校も参加してもらえばよい。こんなところから求人がある、といった情報を提供し、一緒に歩み寄っていけば大学生も魅力を感じて帰ってくると思う。実際には、高校の中でも具体的に私たちの取組は伝わっていないと思っている。したがって、もっともっとコーディネーターがお互いの良さやお互いすべきこと、お互いのこれからの在り方を合わせて、保護者も具体的に描けるところまでもっていかないと、上ばかりで話が進んでいたり、下ばかりで進んでいてもだめだと思っている。十分に可能なことだと思っている。

私は、子どもは一度は地域から出て行ってもよいと思っている。職業学科の卒業生はたくさん残ってくれているが、一度出て行って、帰ってくるに当たり、地域のプロの方々が、こういう魅力があって、こんなことを一緒にやろうと手をさしのべていただければ帰ってくると思う。そういう点も含めて、もっとつないでいけるのではないかと思うので、様々な可能性を十分秘めていると思う。

高校の再編については、学校規模が大きければ良いのかというだけではなく、地

域に高校は必要である。その地域にどのような高校が必要かということ、例えば、農業であればどこに置いて、どのような教育をしていくのかということについて、学校だけでカリキュラムを考えるのではなく、コーディネーターを配置して、大学に行ってもきちんと先まで見て、8年計画ぐらいのスパンで、丹後でこういう農業、例えば、お茶の栽培をしませんか、ここで採れたものと観光、土産、食品をつなぎませんかといった情報を提供してほしいと思っている。

- 宮津市は今、小学校、中学校ともに再編に着手しており、本当に苦労している。意見を聞けば聞くほど再編が難しくなっていく。だが、残されている子どものことを考えると、宮津市は出しているが、もっと早くにきちんとした方向性を出し、教育的な環境という部分は、子どもの発達にとっては何よりも優先されるものだろうと思っている。地域の色々な意見の中で、まずまずの案ができたあたりで、もっと考えよ、もっといい意見、もっといい方法があるだろうということになるが、その間に子どもたちはどんどん取り残されていく。高校だと、そんなに極端な数にはならないだろうとは思いますが、由良川以北から久美浜までの1学年の子どもたちの数が900人になった。これはもう一大事である。さらにあと10年も経たないうちに、これが600人になる。その中で海洋高校と私学を含めて7校。そういう環境が本当に子どもたちにとって良いのかという思いである。大きければ良いという、そういうものではない。だが、小さいということは、子どもたちのお互い切磋琢磨する、多くの人たちの意見を聞いて子どもたちは成長していくという環境を提供することが難しい。そういうことを考えると、やはり一定再編は積極的に考えるべきだろうと思う。本当に中学生の子どもたちが、高校に行ったらこんな勉強ができるのか、こんな部活動ができる、という希望の持てる環境を整えてあげるということも大事な使命だろう。あと、地域の産業界のみなさんや地域のみなさんには、きつい言葉になることをお許しいただきたいが、本当に魅力ある産業があれば、子どもたちは帰ってくる。それぐらいの思いを持って地域から本当に魅力のあるものを創り上げていく、それが大事ではないか。もう一つは、府教委はこの懇話会を開いて、おそらく意見をまとめると思うが、どんな方向性を出すのかということ、ぶれないでほしいと思っている。特別支援学校がこの地域にあるが、特別支援学校にしっかり学んでもらいたい。先ほど他の方から、海洋高校、宮津高校、峰山高校、これでよいのではないか、これでしっかりと子どもの数を揃えながら、というような意見があったと思う。そうすると必ず遠隔地の子が生じる。その場合、府教委は責任を持ってスクールバスや京都丹後鉄道などで通えるようにし、子どもたちの通学費くらいは無償にするぐらいの勢いでやっていただきたい。先ほどから言われているように様々な子たちがいる。なかなか学校に行きづらい子や不登校の子、障害がある子どもたち、そういう子たちに合った教育ができる、そういうものを作ってもらいたい。どこかの分校が空いたからそこへ行けとか、そういうことではない。清明高校という言葉も出てきたが、本当にそういう子たちも通いやすい、子どもたちの色々な発達段階に応じた、また、そういう子どもたちが望んでいる学校をしっかりと創り上げ、子どもたちを大切にしてほしい。これから先、子どもたちが行って学びたいと思うような、そういう魅力ある学校づくりを責任を持って行う。そして、地域では、もう一度、地域でしっかりと根をおろして生活をしたと子どもたちが思えるように、地域も学校もしっかりと魅力づくりをしていくことが必要である。そういう意味で、府にもしっかりと協力をしていただきたいと思う。

- 子どもたちはみんな丹後から出て行きたいと思っているわけではない。それは、親も含めてである。大学等で一時丹後を離れることがあっても、やっぱり丹後を好きな子もいっぱいいると思う。高校に子を通わせる親、子を思う立場からすれば、高校が近くにあるというのは、高校選択の理由としてウエイトは低くなく、やはり近くで学びたいというニーズはある。得てして、北部の高校は鉄道の駅からある程度遠い。宮津や峰山や網野を行き来するわけだが、自宅から最寄りの駅までの自転

車を買って、さらにもう一台の自転車を学校の最寄り駅に預けて通うということをするので、親の立場から言えば、学校と駅の間くらい朝夕2、3回送迎するようなことを考えてもらえたらありがたい。一保護者の意見ではあるが、どう考えても規模を維持することを考えると、全ての学校に普通科と職業科を設置することが難しいならば、北部の中で普通科をある程度集約する、いわゆる実業科、産業科や商業科、農業科を集約した学校を一つつくることを考えると、それもあかなと思う。

- 色々とお話を聞かせていただいて、特に驚いたのが、各高校で地域に根付いた教育を行うという点で色々のご苦労されているということである。私は、府PTA協議会を代表して、この懇話会に呼んでいただいているが、実際私の子どもは小学校低学年で、受検を控えた子どもがいる親の立場とは違うので、自分の子どもに当てはめて話をできるかわからないが、前回と今回、お話を聞いていて、やはり人数が少なくなるとは、当然統廃合は必要になってくるのだろうと思う。前回の話でも、やはり、学校を運営する上で、また、生徒が切磋琢磨していく上では、最低大体4クラス、160人くらいが1学年には必要だという話があった。確かに、実際に学校で勉強するのは子どもたちなので、やはり子どもたちがいかに成長するかということに視点を置くと、やはりそれくらいの規模が確保できる体制は必要になってくるだろうと思う。そうすると、当然、地域において、あそこの学校がなくなるとか、そういう問題が出てくる。そうすると、地域の人にとっては、寂しくなるとか、廃れるとかいう話があるが、やはり、実際に通う子どものためにそうするんだということを目的として、検討していただければと思う。それから、今回の意見交換における観点が3点ほど提示されたが、地域創生という意味では、各学校が本当に特色を活かして、色々手を打たれていると思って見させていただいた。建築科があるところについては、色々特技を活かして、各地域に貢献できるようなものを作ったり、海洋高校は特産品を使って、色々商品開発等々されているなど、色々されていて本当にすごいなと思って見させていただいた。

前回の資料で、実際に当地域における企業の大分類の従業員数の資料があったのだが、企業で働いている人の人数なので、実際には個人農業者であったり個人漁業者であったり、個人事業主の方もいらっしゃるもので、そうした方を含めるとグラフも変わってくると思うが、これを見ていると、当地域では、製造業、小売業、それから宿泊業、飲食サービス業が多いという傾向になっている。特色ある学科の設置という話になると、今ある学科が本当に持続可能なのかということも検討をしていく必要があるのではないかと。要は他府県から子どもを呼び寄せるという意味も含めて、先ほど、魅力ある学校だったらどんな遠いところでも行くという話があり、それは本当にそうだと思う。そういう意味では、各学校が特色をもって学校運営をしていただきたいと思うし、子どもが地元に残るか残らないかというのは、学校で教えられて残るというものではなくて、やはり、普段の生活から、大人が地元は良いところなんだよ、素敵なんだよ、というところを見せていく必要があるのかなと思う。親であったり地域であったり企業であったりの、子どもたちに訴えかけるアピールが少ないのではないかと感じている。

- 京丹後市は大がかりな学校再編をしてきた。9つの中学校を6つに、30の小学校を20の小学校に再編している。さらに来年度には19の小学校になる。平成24年度を皮切りに学校再編を進め、そのときに地域に説明に回って色々と言われたが、今意見として出ているような、子どもの通学のことを始めとして、いわゆる、地域で学校が果たしてきた役割、これについて非常に沢山のご意見をお聞きした。しかし、私どもも色々検討した案を示しながら、根気強く説明をしていった。全ての方に理解していただいたとはとても思っていないが、考えをできるだけ丁寧に説明してきた。高等学校の果たす役割と市や町の小中学校の役割とは、また違った側面があると思うが、一番大事にさせていただきたいと思うのは、地域から子どもたちがいなくなるということは、非常に寂しいことであるということ。よって、先ほどから地

域に子どもを呼び込むという話があったが、できるだけ行ってみようかとか、面白そうだと思ってもらえる、高校が元気になるような形のを、是非地域の方にも説明の機会を十分持ってもらいながら進めていただけないか。私どもも、一箇所あたりに説明に行った回数は、計り知れない。最後には、地域の方々やPTAの方が、学校づくり準備協議会を立ち上げていただき、どんな学校にしていこうか、どんな閉校式、開校式にしようかというような、学校の内容についての意見をいただくようになった。大変ではあるが、先ほど意見があったように、地域、特に大学のない地域で高等学校が果たす役割というのは非常に大きいと思うので、まずは、その点を十分配慮していただき、おもしろいなとか、行ってみようかと思われるような高校づくりを是非お願いしたい。

- ◆ 今、地域への丁寧な説明ということがご意見としてあったわけであるが、先の府議会で同じような質問が地元の府会議員からあった。私どもとしては、こうして懇話会を設けて、たくさんの方々からご意見賜っているが、この懇話会のメンバーを広げても、人数が多すぎて逆に一人一人からご意見をいただくのが難しくなる。したがって、この場とはまた別の形で、地域の方々、その地域をどう捉えるかは検討中で、それぞれ高等学校のある地域を中心にとということになるかと思うが、PTAの方、地元の方々に説明したり、意見を伺ったりという場の設定を検討すべきかと考えているところである。

- ◇ 普段の生活の中から、地元が好きだというようなことを、子どもたちにしっかりと伝えていくというようなご意見をいただいているが、小学校の立場から、小学校における取組、あるいは、小中高の連携というあたりはいかがか。

- 地域創生、魅力ある地域のことを学ぶ機会については、当然、小学校の場合には、地域に根ざした教育をしているので、総合的な学習や社会科また生活科など色々な形で地域の中で学習し、地域の人材の方から学ぶ機会というのはたくさんある。そういう中で、私が個人的に思っているのは、子どもたちは、大体どこの小学校の子どもたちでも、地域をととても大切に思う、ふるさとを大切にする、そういう子どもたちばかりだと思っている。また、そういうことを目指して、どの学校も教育活動を進めてきていると思う。そのやり甲斐というか、ただ、テストの点数だけが上がるのではなくて、小学校教育の中で、その地域が大切にされているんだということを知ることが、やはり、次のキャリア教育につながっていくものだと思うし、京丹後市の小中一貫教育で、中学生の手本の姿を学ぶ、または、近くの高校の、本校の場合、網野高校で学んでいる先輩の姿から学ぶ、そういうことがすごく地域に対する意識を高める、また大事にしていこうという意識につながっていくように思っている。少し話は変わるが、再編の話の中で、この地域全体を支えているのは一体何かということ個人的に思っていたのだが、社会を支えているのは、企業であったり、サービス業であったり、その中で生活をしている、社会を支えている大人だと思ふ。製造業であったり、医療であったり介護であったり、観光又はサービス業であったり、色々な人がそれぞれで支え合って、営みを行っている、このことを子どもたちにしっかりと伝えていく。どんな営みもとても大事なんだということ、本校で言うと、PTAの役員の方や、地域の村の役員の方も、地域の農業科や機械科の出身であったり、もう年配の方であるが、地域に残って支えていただいている。そういう面では、職業科の方々が今地域を支えているという実感を、高校生はすぐに社会を支える人材になるので、その生徒たちに持たせていく、そして力が出せる場所があるんだよ、ということ伝えていかないといけないのではないかと。小学校は小学校なりに、そういう力が自分にもあって、ゆくゆくはその場所で丹後地域を支えていけるんだよ、というような思いを育てていきたいと思う。そういう面では、先ほど意見があったが、コーディネートする人材が必要で、その地域社会、何人で今の丹後を支えらしたら、製造業の方は何人ぐらい人員が必要で、観光や医療関

係では何人くらい、そして、その人材をどれくらいの子で支える、さらにまた、広げていけるのか、というような展望も持ちながら、是非お世話になれたらと思っている。

- 小学校の立ち位置ならではというところで、2つ3つ感じていることをお伝えできればと思う。1点目は、今、意見があったが、小学校の総合的な学習の時間をはじめとする、様々な教科・領域の中で、地域とのつながりを題材にした学習をその気になればたくさん仕組んでいけるということである。実際に各小学校においても、学校の特色なり強みを活かして地域の方々と、また、地域の文化遺産や文化的な物品等に焦点を当てた学習を組んでいる。例えば、本校のすぐ側にちりめん街道がある。ちりめんをモチーフとした行事・取組・イベント、村おこし・町おこしと、年間を通して展開をされている。本校でも各学年、主には1年生の生活科と4年生以上の総合的な学習の時間の中で、ちりめんを題材にした学習を組んでいる。地域の方も、NPOの方も含めて非常に熱心に子どもたちに指導をしてくださる。大江町の方に蚕を仕入れに行き、桑の葉を用意して、座繰り体験等についても指導いただいたところである。それらの活動を通して、地域に対する誇りと愛着を小学校段階で育んでいくことを大事にしている。

2点目は、学業、学力、これはやはり小中高と一貫して、子どもにとっては非常に大きな課題である。あるデータによると、学習意欲を視点として見たときに、小学校低学年くらいは、賞罰、褒められたりしかられたりということで、結構学習意欲が高まる。中学年から高学年から中学校にかけては、内的な学習意欲、自分の中で、これをやってみよう。英語が好きだからもっと打ち込んでみよう、というようなことが上昇曲線に影響してくる。ただ、中学校の中盤以降から高校にかけては、将来目標を持っている生徒が最終的に自己実現が可能な%が非常に高いという。したがって、小学校段階においても、キャリア教育をもっと充実させていく必要があると思う。望ましい勤労観・職業観を子どもたちの中に具体的なイメージとして持てるようなカリキュラムを用意していくことは、小学校の重要な役割だろうと感じている。そして、福知山に中高一貫校が開校して、私どもの地域から進学する生徒が出てきている。そういったことを鑑みると、進路指導というと中学校以上というイメージがあったが、小学校においても今後、進路指導、進学指導を強化していくことをイメージしている。具体的には、6年生の段階で進路調査も平成28年度には具現化していこうというビジョンを持っている。

最後に、魅力ある高等学校、絞っていえばそうなるが、小学校の卒業生と色々な機会に出会うことがあるのだが、生き生きと元気に過ごしている生徒というのは、やはり、自分が学んでいる高校にモデルとなる、憧れを持つ先生、指導者がいる。コミュニケーション能力やソーシャルスキルをきちんと持った先生たちがいる。そういった人的な環境のもとで学んでいる子というのは、やはり前向きだなあと感じる。データもなく、ざっくりした印象で話してしまうが、そうなる小学校も頑張るので、高等学校も、魅力ある高等学校の内実に、魅力ある指導者、部活等も含めて、当然努力されていると思うが、さらにお願したい。そのことが、このふるさとに誇りと愛着を持つ、大事な人としての生き方、在り方のモデルとなり、この地域に生きて働く子どもたちの吸引力になるのではないかと思う。

- ◇ 先程から、子どもたちの学びの環境について意見をいただいている。子どもの教育環境を整える中で、学校規模についても、一定規模が必要という意見を前回いただいた。一方で、小さな集団で学ぶ良さも活かすべきという意見もいただいているが、実際、丹後における少子化というのは、急激に起こっているとはいうものの、ここ数年その傾向は見えてきている。その中で、各高等学校において、規模が徐々にではあるが小さくなってきているので、その現状、課題等があればお話いただきたい。高校の立場からはどうか。

○ 魅力ある高校は、高校生がやる気になれるところだと思うし、夢が持て、友だちが多く持てる、あるいは、何か将来の可能性が見えてくるとか、そういう漠としたようなことだろうが、青年期の若者には絶対必要であろうと思う。夢に向かっていこうではないか、と語れる人が必要である。そういった意味で、何で語るかという、やはり指導者だと思う。一定、この指導者としての集団を整えていく必要が高等学校にはある。例えば、それぞれの学科・教科を持っている。専門性が高いだけに、それぞれ分担してやっていくわけだが、担当者が1人であれば、その先生が全部責任を持つことになる。逆に言うと、その先生があぐらをかいてしまうとそこまてになってしまうわけで、そうならないように注意しなければならないし、教師自身が切磋琢磨できる集団を保てる人数規模が必要になるかと思う。併せて、世代交代も進んでいっている。若い先生方が増えてきて、ある意味、活気のある状態である。高校生の年齢に近い先生方が増えてきているという意味では、エネルギーを感じる場面が多くあり、時に熱く語ってくれているなあと思うこともある。しかし、一方で注意しなければならないところもある。やはり、それだけではない教育というものもあるので、しっかり、生徒の腹の中に届ける語り口、指導力といったものを持たなければいけない。それは、いくつかの経験を積むことでできていくものもある。そういった点で、年齢的な組合せということも組織としては必要と感じるところである。教員の規模が小さくなれば、非常に厳しい状況になるというのは事実である。それが直接生徒の教育に反映していくのも事実だと思う。あとは数から見て、部活動の指導者が整わない、あるいは部活動に生徒が集まらないというようなことが、生徒が少なくなれば当然出てくる問題であり、そのことで夢を小さくしなければならない、希望を諦めなければならないというような状態では、人は育たないと思う。できるだけそうした夢や希望が育つような環境を整えることがわれわれの務めかなと思う。

○ 特別支援学校は、当然障害がある子どもたちが学んでいるところだが、卒業後の進路はどうかというと、遠い都会に出向いて仕事をすることや、都会に出向いて大学に進学するということはなかなか難しいので、ほとんどの子どもが、地元にとどまり仕事をすることになる。本校の場合、いわゆる福祉就労といって作業所等に行く生徒もたくさんいるわけだが、もう少し、色々な場面で働く場所、機会がないだろうかと色々苦慮しながら、努力もしているところである。先ほどコーディネーターする役割の大切さについて意見があったが、本校は平成27年度に文部科学省からキャリア教育、就労支援等の充実に関する事業の指定を受けて、就労支援コーディネーターに、定期的に来ていただいている。その中で、卒業後の就労場所ということで、職場実習をさせてほしいとお願いに上がるときに、教育関係者だけで行くと非常に狭い視野でしかなかったが、その方に来ていただく中で、商工会議所やライオンズクラブなど企業の集まりのところを紹介していただき、そこで話をさせてもらう機会ができた。その後、色々反響があり、そういう生徒さんがいるなら、うちで実習することが出来ますよ、と言う声も聞かせていただいている。来年度に向けてそうした実習先で、子どもたちがそこで頑張れるように指導していく必要があると思っており、現在、計画しているところである。コーディネーターする役割がないと、学校でいくら頑張っているにもかかわらずなかなか地域とつながらなかったり、必要だという地域や企業の思いがつかないということがあるので、高校の在り方の問題と少し離れると思うが、地域の中で子どもたちがとどまり、そこで仕事する、活躍をするということであれば、そういった仕組みも地域としても考えていただけると、また違う在り方が見えてくるのではないかな。

もう一つは、本校の生徒たちが職場で色々な実習をさせてもらうときに、色々な指導も受けるわけであるが、「頑張っているね」とか「ありがとう」「うれしかったよ」と言ってもらえることがすごく生徒の励みになる。自己有用感というか自己存在感がきちんと保てる。そうすると、「あそこで働いてみよう」とか、「あそこに行ってみよう」という気持ちが強くなるということも当然のこととしてあるわけで、

私たちは地域、地元の事業所ともっと密接に関係しながら働く体験をする場所というものを大事にしていく必要があると強く感じるし、そして自分を大事にしてくれるところがあれば、そこで働きたいという気持ちも当然起きてくる、その辺のことが地域に残る大事な大元にもなってくるのではないかと強く思っている。

最終的に色々な進学をする子どももいる。また地元に残る子どももいる。特別な支援が必要となる子どももいる。子どもたちが全部トータルとして、学べる機会として、ぜひこれからのことを展望していただけるとありがたい。多様な学びの場ということも考えていただきながら、府立高校として、特別支援学校も含め義務教育を終え、次に社会に出て行く子どもたちを育てるという視点に立ってぜひ検討いただければありがたい。

- 卒業後に地元に残る、あるいは戻ってくるという観点だが、本校の場合、田舎が好きという生徒が多いのかどうかかわからないが、介護、看護、幼児教育、栄養士などの職について、専門学校卒業後などに戻ってくる率が非常に高い。一つには、やはり高校3年間に、様々な地元での体験、本校の場合は福祉の類系があるので、各施設のボランティアや、保育所の延長保育のお手伝いに行くといったことを3年間続ける。そうした中で人間関係ができて戻ってくるという取組が大きいのではないかと思っている。

本校は「人に自分たちの能力を差し出す」という教育を行っている。ただ、介護の分野は、給与条件などが非常に厳しいため、今の若者はなかなか選ばない。介護関係の専門学校が厳しい経営状態にある中で、本校はあえてこだわろうということで、毎年10数名の生徒が介護を選択している。

2017年度に向けてだが、先日、公立高校の中期選抜が終わったが、今年も定員を割っている学科が多い。第2志望もあるので最終的な割れはそれほど多くはないかもしれないが、毎年30~40名も割っているという現実を、中学生や保護者がどのように見ているのかと非常に懸念する。公立の序列化がどんどん進んでいく。規模が小さい学校と大きい学校など、差が出てきたときに、もっと拍車をかけるのではないか。丹後地域については通学の手段を考えると、定員枠をある程度持っているので割ってもやむを得ないのかもしれないが、この定員割れという現実を見直してみる必要があるのではないかと思っている。

- 生徒減少期における丹後地域に生徒を呼び込むという観点で設置すべき学科ということだが、高校生は自分の意思で様々なことを考える年齢であるので、将来高校卒業後に職につける具体的なイメージが持てるような専門学科でなければ厳しいと思う。単に隙間であるとか、他にないといったことではなく、職を得て生計を立てられる見通しがつく学科。丹後地域の豊かな自然や文化を考えると、水産系か農業系などが良いのではないかと思う。

次に地元生が魅力を感じてくれるような教育だが、平成27年から32年の5年間に、丹後地域では中学3年生が5%以上減少する。これは大変なことである。北部の勢いが本当に心配される状況であり、できるだけ3年生が他の地域に出ないような策を具体的に考えていく必要がある。何かに頑張れる性質を持った3年生がやはり地元にてほしいし、そういう子たちが部活動や勉強のために外に出るのはよくない。他府県に出るケースもあるわけで、受験勉強を見据えた勉強を頑張る生徒。主要クラブで小・中学校から取り組んでいて人よりも自分が優れているという感覚を持ちながら、もっと頑張りたいと上を見る生徒、こうした生徒がとても重要なので、そういう生徒がこの地域にとどまってくれるような策を打つことが大切ではないかと思う。

具体的には丹後地域の各地域に、一定の学年生徒数を持つ普通科を中心とした拠点となる公立高校があって、先ほど情熱のある先生がとても大事だという、本当にそのとおりだと思うご意見を聞かせていただいたが、野球やサッカー、バスケットボール、バレーボールといった集団種目において、情熱と指導技量を持っている先

生を各学校に1人でも、1つの部に1人でも配置ができれば、丹後地域のその種目を頑張りたい生徒はとどまるという仕組みができる。そういう具体的な策をいくつか考え、何とか意欲ある生徒がこの地域から出ないような取組をしてもらえればと思う。

最後に通学方法だが、今後、公立高校の統廃合を進めるということは、これだけ生徒数が減少していく中では避けられないことだと思うので、もしそうであれば、1つには通学網の整備が不可欠である。これは高校の数が減ることでその維持費がかなり浮くと思うので、例えば各中学3年生の立場で考えると、地元の公立中学校までは自分で通うか、保護者に送ってもらって通学をしていたわけだから、公立中学校をハブのような役割にして、その中学校から最寄りの京都丹後鉄道の駅まで府がバスを走らせる。また、各公立高校の最寄り駅からバスを何本も走らせて、ハブから自宅、そしてそこからバスというのもおもしろいと思ったりもしていた。経費がとても大切であり、やはり通学網の整備とともに、保護者に対する通学費補助制度の充実が不可欠であろうと思う。例えば、島根県であれば、保護者が自家用車で公立高校まで子どもを送る場合、ガソリン代に対する補助制度がある。様々な制度があるので、できる限り保護者の負担がなくなるよう他府県の事例を研究してほしい。なお、その場合は、府の高校教育を受ける生徒の保護者に対する補助制度ということになるので、公立高校のみではなく、私立高校も含め、府全体で府北部に対する制度として検討してもらえればありがたい。

- 就職の関係だが、本校の場合は3分の1が就職する。その中には将来的に地元に戻ってきたいという生徒がいる。ただし、その時の受入先がないというのが実態である。本校の場合、70名の卒業生のうち23名が就職する。さらにそのうちの14名が地元に残ってくれる。先ほど福祉関係の話があったが、やはり福祉が一番多い。その他に地元にある製造業等である。また現在期待をしているのだが、農業関係で帰ってきたいという生徒がいる。第1回懇話会の中で女子力の話があったが、実は女子2名が農業に興味を持ってその方向に進みたいと頑張ってくれている。そういう意味で、市や府にもお願いをしながら、どうにか地元で働く場所を増やし、確保してもらえないかと思っている。

また、本校には農業系の生産科学系列と福祉系列があるが、20年前ぐらいはちょうど学科改編の波が押し寄せてきて、各学校が新しい施設・設備を目玉に取り組んできたが、近年はそれも一定落ち着き、更新の時期には入ってきているが、今は、専門学科間の連携に重きを置いている。水産関係と農業関係では、ヒトデ肥料の開発・活用。さらにはそれをどう販売していくか。網野高校では旅行ツアーを企画したりもしており、そうした企画や製品をどう販売していくか。単純に6次産業化と言われるのだが、それだけではなく、学科を超えた取組によって教育内容を充実させ、連携について視点を置いて今後考えてみたいと思っている。

- 製造業である私どもの業界も非常に人手不足であり、「それなら高校に求人票を出したらどうか。」という話をするのだが、「出しても一人も来ない。それよりもハローワークに行った方が早い。」というのが現実であり、我が業界での一般的な声であるということも受け止めておいてもらいたい。

そうしたことを踏まえ、先般から私どもも各地区を回って組合員と懇談をしているのだが、第1回懇話会の資料をもとにして、18年後には受検生が640人になるといったことも説明している。一番多いときは確か二千数百人いたと思う。我々が高校生の時代、45年程前には峰山高校で45人のクラスが1学年で10クラスあった。もっと上の先輩の代は50人で10クラスだったと思うので、今でいうと1高校+ α ぐらいの状況に10年後、18年後にはなる。「ということは、産業構造も変わってきますよ。」という話から始めなければならない。人が不足することによって産業として成り立たなくなってくる。現在年配の方はおそらく60歳で定年になって、再雇用で65歳までということになると思うが、今50歳の方が15年後には65歳になって現場か

らいなくなるけれども次の補充はないということになる。これは切実な問題であり、それをどうするか。「これは宿題として組合員さんにお返ししておきます。」という話をさせていただいたところだが、こうしたことを踏まえて、先ほどあったように、私どもの業界に一番関係するのは峰山高校産業工学科であるが、これまではほとんどつきあいがなかった。1年に1回インターンシップで産業工学科の生徒を受け入れているが、「こんなことではだめですよ。」ということで、今年度から峰山高校ともっと親密にお付き合いをしようということになり、先生方と当方の理事で一度お話ししましょう。これからも定期的にやっていきたいと思いますということになった。このことによって高校にもある意味プラスになるのではないかと思っている。高校の要望を我々が府教委にもあげ、我々の現状や企業の内情も知っていただく。高校生にも今から企業の状況を見てもらい、丹後にはこんなにすばらしい企業もあるのだということを知ってもらえれば、専門学校や大学に行っても、帰ってきたいという気があれば当然帰ってこられるだろうという思いを持っている。産学連携は大学と企業との関係だが、大学はないので、高校との産学連携を今まで以上に密にしていかなないと、子どもたちが帰ってくる素地はなかなかできないのではないかという思いがあり、去年から始めさせていただいた。今年もまた違った形で連携させてもらう。今は峰山高校だけだが、網野高校や久美浜高校にも広げ、同じ素地で話ができる場を設けていけば、より子どもたちの受け皿にもなっていく可能性があるのではないかという思いで活動をしようと思っているので、その際には協力してもらいたい。

- ◆ 多くのご意見をいただいたので、私どもがどう受け止めているかについてお返しさせていただく。

今回、統廃合を進めるというお話もあったわけだが、単に子どもが減ったから学校を統合するという発想ではない。子どもの数が縮小し、学校の規模も小さくなっていく中で、どう最適化を図るかという観点である。

最適化については、やはり子どもたちのためにというのが一つ。それから地域の発展のためにということが二つ目。これは絶対に欠かせない部分だと思っている。そういう思いの中で、検討の視点としては、一つは、先ほども峰山高校の産業工学科を巡ってご意見があったし、農業に関する話もあったが、学科の置き方である。まず普通科については、学力の高い子が入学してくるケースが多いが、ここがしっかりしないと高校入試の時点で丹後から生徒が流出してしまうことが懸念される。したがって、しっかりと進学指導をする普通科がこの与謝・丹後に必要だと思っている。

それから専門学科であるが、海洋高校は、水産教育と関連する諸産業に向けた教育において確たる地位を築いて取り組んでいるので、海洋高校の教育は基本的にさらに発展という形で継続だろうと思っているが、問題は農業、工業、あるいは商業といったところである。ただし農業も、先ほどご意見があったように、跡を継ぐ者がある以上、全く火を消すわけにはいかないのだろうと思う。また、京丹後市では農業や関連して食を中心としたまちづくりを検討し推進されているので、そうした部分についても目配りをしていかなければならない。網野高校には商業に関する学科があるが、ここでは観光企画や、アントレプレナーという少しおおげさだが、一定の企画をしていく、あるいは起業といったことをどう発展させるかということはあると思う。工業については、峰山高校の機械系の学科と宮津高校の建築科があるが、建築科は地元との連携で様々な活動をしている。機械系については、先ほど峰山高校に対する期待についてご意見をいただいた。その他、もっと電気の勉強をする場があってもいいのではないか。デザイン系統については状況が合わなくなって志望も少ないから見直した方が良いというご意見もあり、こうした点はリフレッシュする必要があると思う。その他、福祉など、今後地元に必要な学科をどう配置していくかということは、本日のご意見を踏まえてしっかり検討したいと思っている。

次に課程であるが、京都市内には、4年間の課程の昼間定時制である清明高校という、大変ゆっくりとしっかりと学ぶ高校をつくった。京都市内に限らず、フレックスハイスクール構想と言っているが、これを北部でも展開することを構想している。清明高校に入学した子どもたちは、この丹後・与謝で言うと分校に多く就学している。この子どもたちの教育の場はもっと発展的につくりあげていく必要があると思った。

次に部活動である。他府県からも呼び込む勢いでということと言うと、野球の話もあったが、峰山高校が甲子園に出場してから10数年経っているが、丹後や与謝にはレスリングやカヌー、重量挙げなど様々な全国で活躍する部活動がある。こうした種目を中心はどう発展させるかということが、やはり持てる資源の活用ということで、現に他府県からも若干来てくれている子もいるので、ここを大事にしていくべきかという思いを持っている。

各学科のカリキュラムはそう簡単にはできない。この高校にこういう学科を設置するとしても、必要な指導者、教える内容を検討するには月日を要する。前回8月を目処にと申し上げたが、この8月とは何か、ということをもう一度説明させていただく。先ほど中学校現場の意見として、来年度の目先のことというお話があった。来年度の子ども数からすると、4学級程度減らさなければならないと申し上げた。これだけ聞かされると、みなさん大変不安だと思う。何の展望もないままに学校規模が小さくなる。したがって、私どもはせめてこの夏の定員発表の時には、何らかの形で府民に向けて、与謝・丹後の皆様に向けて、丹後や与謝の教育が発展するという見通しを持っていただくために、何かメッセージを出したいという思いで申し上げたわけである。

しかしながら、様々なご心配もあるということで、地域へのご説明なども間に挟んでいかなければならない。また、今申し上げた中で、なかなかこの場で具体の案は詰め切れないので、どこかで私どもの基本的な考え方をお示ししなければならぬと思っている。それをもってまた様々なご意見をお聞きするというプロセスが必要だと思う。したがって、それで8月にどこまでたどり着くかということだと思っている。

今日のご意見を踏まえ、私も府教委の代表でここに来ているので、このようなことを考えているということ、そうした思いでご意見を承ったということで、発言させていただいた。

- ◇ 第3回に向けては、第1回、第2回の懇話会でいただいた意見をまとめ、さらに、以前に実施した検討会議での意見や、他府県の取組状況も踏まえて、府教育委員会としての基本的な考え方をお示しし、それに対して様々なご意見をいただきたいと考えている。

開催は5月以降を予定しており、おって日程を案内するのでよろしく願いしたい。